

平成30年度 奈良市立伏見幼稚園 研究実践概要

園長名 米澤 義恵
全園児数 84名

1. 研究主題 「豊かな体験を通して、主体的に活動する幼児をめざして」
ー幼児が自ら考え、遊び込む援助のあり方ー

2. 研究年度 初年度

3. 研究主題設定理由

遊びや活動の中で、保育者の指示を待ったり、保育者から与えられた環境のみで遊ぼうとしたりする姿が見られる。豊かな体験の積み重ねが、幼児が自ら主体的にやってみようとする意欲につながると考える。幼児の心に残るような豊かな体験ができるようにするためには、保育者が、幼児の発達段階に沿った保育内容を考えたり、援助を工夫したりすることが必要不可欠である。よって今年度は、遊びや活動を通して、幼児が自分で考え、遊び込むための、保育者の援助のあり方について探る。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

幼児が主体的に「やってみたい」「こんなふうにしたい」と考え、遊び込むことができるような保育者の援助について考える。

②研究の重点

- ・日々の保育実践の中で、職員間で連携を図りながら、幼児が主体的に遊ぶ姿について探る。
- ・幼児の心が動かされるような豊かな体験を通して、自ら考え遊び込むことができるような、発達段階に応じた保育者の援助を考える。

③活動の方法

【びっくりダンボール迷路にしよう】5歳児（4～11月）

秘密基地づくりに興味をもった数人の友達が集まり、大きなダンボールに穴を空け、2つつなげると、偶然、出口が上を向いた。顔を出し「びっくり箱にしよう。ここから顔を出そう」と、順番に顔を出して遊んだ。

翌日以降、ダンボールを3つ、4つとつないでいくと、「ダンボール迷路になった」「びっくりダンボール迷路ってことにしよう！」と嬉しそうに話している。「もっと長くつなげよう」と、役割分担してダンボールをつないだり、文字や絵をかいいたりした。保育者も側で見守りながら、子どものアイデアに共感したり、必要に応じて道具の扱い方を知らせたりした。前より迷路の中が暗くなったことに気づき、「おばけやしきにしよう」「ダンボールをドンドンってしたらびっくりするかな・・・」とやりとりをしながら、中に入る人と外から驚かす人に分かれて遊んだ。

10月に『ライオンキング』の絵本やDVDを見たことで、以前遊んでいたおばけやしきやジェットコースターとつながり、お話の世界観を表現したジェットコースターができあがった。遊

びの話し合いで「もっと速く滑りたい」と意見が出たことで、「下が少しぼこぼこやからゆっくりなのかな」「下になにかを敷いたらいいんじゃない？」と考え、ダンボールやブルーシートなどを敷き、試したが「敷いた方が遅くなる・・・」と気付いた。保育者が、様々な材料が倉庫にあることを伝えると、自分たちで再び探しに行き、フローリングのシートを見つけた。「これやったらツルツルや」「丈夫そう」と、そのシートを敷き滑ると、速く滑ることができ、「すごく速くなった！」とスピードに満足していた。その後「もっと絵本みたいにしたいな」と伝えたので、「どうすればいいかな」と提案すると、「葉っぱがたくさんいるね」「景色をかこう」と、葉っぱをたくさん集めて敷き詰めたり、友達と相談しながら背景の絵をかいて置いたりして、イメージを共有しながら遊びを進めていった。



<反省・評価>

・子どもの考えに共感したり、時には一緒に考えながらつくる様子を見守ったりした。自分たちで考えてつくることが出来た喜びもあり、友達と思いや考えを出し合いながら、どんどんイメージをふくらませていき、思いが実現するようにはどうしたらよいかをすすんで考える姿につながったと考える。

・大きな段ボールやブルーシート、フローリングのシートなど、様々な種類の材料を、子どもがいつでも使える場に用意したことで、考えたことを実現しようと、試したり工夫したりして、友達と一緒に考える姿があった。

・以前より遊んでいた「おばけやしきごっこ」と「ジェットコースターごっこ」という2つの遊びがあったことで、今回の遊びがうまれたと考える。継続して遊ぶことで、自分たちで考えて遊びを発展させ、遊び込む姿がうまれた。

【小さな玉入れ】4歳児（6月）

保育室の制作コーナーでA児がストローと紙コップを手に取り「コップの真ん中につけたい」と、紙コップの底の真ん中にストローをつけようとしていた。保育者が「お手伝いするね」と、手を添えテープでつけやすいようにした。A児がつくっている様子を見ていたB児は、運動会の経験から、「これが立ったら玉入れみたいになるね」と、A児に話すと、「先生、立てるようにしたい」と、保育者に伝えた。A児の思いが実現するように保育者は、安定するような大きめの箱や紙皿、ゼリーカップなどを準備し、A児とB児が、使いたい素材を選べるようにした。紙皿を選んだA児が、ストローと紙皿をテープでつけようとする姿を見て、B児は、A児が最初作り始めた時に保育者が手を添えていたことを思い出し「持っておくね」と手を添えた。A児の玉入れが完成して嬉しそうにすると、B児も、立てるようにしようと、土台になるようなゼリー容器を持って来てつけようとしたが、安定しない。A児の土台が紙皿であることに気づき、B児も紙皿を選んでくっつけ、玉入れが完成したので、保育者が「うまくくっついたね」と声をかけると、顔を見合わせて喜ぶ。出来上がった籠を見てC児が「玉入れやったら玉がいるよ」と言ったことから、A児とB児は、折り紙を小さく丸めて玉をたくさん作り、小さな玉入れで、友達と一緒に何度も繰り返し遊んでいた。



<反省・評価>

・運動会の経験を通し、友達からのアイデアに耳を傾けようとする子どもたちを見守ったり、一人では貼ることが難しいところや思いを形にしたいがどのようにすれば良いかわからない時に、手を添えたり言葉をかけたりするようにした。保育者がそばで見守ったり声をかけたりしたこと

で、安心して遊ぶ姿が見られた。

・素材を何種類か準備することで、自分たちで考え、つくりたいものをつくれるようにした。思いが実現するように考え、一生懸命つくった玉入れだからこそ、友達と一緒に何度も繰り返し遊ぶ姿につながった。

【かいこ、ふわふわだ】5歳児（10月）

9月から、カイコを卵から孵化させ、飼育をしてきた。毎日糞の始末、エサやりなどの世話を続けると小さな変化に気付く子どもが増え、グループごとに、カイコについて気付いたことを発表する時間をつくった。各グループが、カイコを初めて触った感想を伝える。「ふわふわしてる」「歩いたらくすぐったい」と話す。しかし、「カイコが怖い」と触ることが苦手な子どもがいた。それを聞いていた子どもたちが「触っても怖くないことを教えてあげたい」と話し、その日の発表を「カイコのこともっと知ろう」に変更した。「ひっくり返したら口があるけど小さいから噛まないよ」「背中を撫でたらマシマロみたいに気持ちがいいよ」と子どもなりの言葉で発表していく。保育者は、子どもの恐怖心を取り除こうと「どこが怖い？」と問いかけると、「足が怖い」と言ったので、「ここの足は尖ってたり、こっちの足の先は丸くなっていたりして面白いんだよ」とカイコの特徴を知らせた。また、少しでもカイコに触れることができるように、「怖いなら誰かが持ったら大丈夫だよ」と伝えると、友達が持っているカイコを撫でることになった。クラスの友達に見守られながら、「あ、ほんとだ。カイコってふわふわ。」と触れたことを嬉しそうに話し、「みんながカイコを好きになって嬉しかった」と、満足そうに話していた。



翌日から、すすんでカイコにエサをあげたり糞の始末をしたりしていた。友達と一緒に世話をすることで、より興味関心が高まるように、子どもたちが見やすい場に図鑑を置いた。そうしたことで、友達と一緒に、気付いたことを図鑑で調べたりするようになった。

<反省・評価>

- ・話し合いのテーマをしぼり「カイコの特徴を知ること」にしたことで、共通の思いをもつことができ、自分たちからすすんで、友達にカイコの特徴を伝える姿につながった。
- ・カイコに触ることが苦手だった友達も、カイコに触れたことで自信となり、生き物を大切にする気持ちが生まれ、意欲的に世話をする様子が見られた。

【ドングリエレベーター】4歳児（11月）

園庭の総合遊具の上からドングリを落として遊んでいた。子どもたちの提案で、様々な落ち方を体験できるように、保育者がトイやホースを準備すると、ドングリを流す遊びを楽しむようになった。A児が「ドングリを一気に流したい」「もっとドングリをいっぱい上に持って行きたい」とポケットにドングリをたくさん入れながら保育者に伝えた。それを聞いていたB児が「運び屋さんするわ」と言い、ドングリをたくさんポケットに入れて総合遊具を何往復もして運んでいた。下から上を目がけてドングリを一粒ずつ投げる子もいた。それを見ていたC児は「エレベーターつくったらいいねん」と、友達に提案する。「それいいなあ」「どうやってつくろう」と、何度も保育者と一緒に考えて、エレベーターになるような用具を身近にさりげなく準備した。すると、滑車のようなエレベーターが出来上がった。ロープについているバケツにドングリを満タンに入れて「おっけーで一す」と下にいる子が言うと「ありがとうございまーす」と、上の子がロープを引っ張って、たくさんのドングリを総合遊具の上に運んで遊んでいた。



<反省・評価>

- ・ドングリをたくさん運びたいという思いからこの遊びが始まった。エレベーターをつくったことで、遊具の上にいる友達と下にいる友達との会話が自然にできて、関わりながら遊ぶことができた。
- ・ドングリ転がしの遊びの中でドングリを運ぶことや転がすこと、ドングリを集めることなどたくさん遊び方があることで、一人一人が様々な方法で楽しむことができ、遊び込む姿につながったと考えられる。
- ・総合遊具という高さのあるものを使うことが、子どもの予測以上の結果を導くことにつながったが、安全に遊べるように、保育者が十分に配慮する必要がある。

5. 研究の成果

子どもが、豊かな体験を通して、主体的に活動するための保育者の援助のあり方について、3つのことがわかった。

1つ目は、遊びや活動の時間を保障することの大切さである。「やってみたい」「こんなふうにしたい」と、遊びの中で何度も繰り返し試したり工夫したりできるような場や遊びや活動を工夫し、じっくりと遊びを楽しむことができる時間を保障することで子どもの次への遊びへの意欲につながると考える。毎日継続して遊んだり、長期的な見通しをもって活動したりすることで、幼児の心に残る豊かな体験となり、遊びがもっと楽しくなるように考えたり、幼児自身が見通しをもって意欲的に活動に取り組んだりすることができる。

2つ目は、発達段階に応じた子どもへの声かけの必要性である。4歳児では、友達や保育者と遊ぶ中で楽しさを感じ、友達の様子に興味関心を広げていく。安心できる保育者のそばで、自分の思いを伝えたり友達の思いを聞いたりして、それぞれのイメージをつなげて遊ぶ。5歳児は、様々な体験を通して自分のイメージが膨らみ、これまでの経験を活かして友達と一緒に実現しようとする気持ちが高まる。よって、4歳児では、一人一人の思いを引き出す言葉をかけたり、一緒に考えたりする必要があり、5歳児では、子ども同士のやりとりを見守りながらも、時には保育者が声を発し、考えたり話し合ったりする視点が明確になるよう提案する必要がある。

3つ目は、子どもの興味関心に合わせた環境の準備をする重要性である。目に見える場所に、様々な種類や季節に応じた素材、材料、用具などを置いておくことで、子どもが自分で考え、やってみたいと思ったときに、すぐに試すことができ、意欲を継続することができる。

以上のことから、それぞれの発達の姿において、主体的に活動する幼児を育成するには、各年齢、各時期に応じた保育者の援助が大切であることがわかった。

6. 今後の課題

来年度よりこども園になり、学年が増えたり、給食になったりすることで、遊びや活動時間の変化が予想される。今年度学んだ、継続して遊ぶことの大切さや、発達段階における援助の違いなどを念頭におき、職員間で連携をとって、保育をすすめていくことで、遊びや保育内容の充実に努め、幼児の遊びへの意欲を高めていきたい。